

明治女の心意気

(2013.1.04)



若いお母さん方の中には、「沢村貞子」という名を知っている人が、どれほどいるだろうか。私は、この明治生まれの女性に憧れている。シャキッと背筋が通って、粹でしゃれている。その芯の強さには、畏敬の念を抱いている。貧しい正直者が苦しめられるような社会は、間違っている、と考えていた。何も悪いことはしていないのに、その考えを変えろという、特高の拷問にたいしても、決して屈しなかった。

沢村貞子の本は、ほとんど読んでいるが、その中でも忘れられない話がある。家の前で近所のおばさん達が、ガヤガヤ井戸端会議をしていると、隣家の女中が「ネエネエ、あそこの奥さん、女郎屋にいたんだって！」と言うと、沢村のお母さんが、その女中をキッとにらんで「それがどうした。今は立派なお店の奥さんだよ」ときっぱりと言った。戦前は、貧しくて、家族のために身売りをしなければならなかったこともあった。過去がどうあろうと、今の姿が大切なのだ。こういうお母さんに育てられると、筋の通った生き方ができる人間に育つのであろう。

沢村の生き方には、学ぶことが多い。沢村の言葉の中に、共感するものが多い。「世界が得をすること、それは平和。（損をすることは戦争か…）」「少々ぐらい、いやなことは黙って我慢しなければ、なかなか平和に暮らせない。ただこれだけはどうしてもいやだと思ふ事は、しないようにしなければ…決して、しないように。残りの人生を、そういうふう生きてゆくためには、目立ちたがらず、誉められたがらず、歳に逆らわず、無理をしないで、昨日の嫌なことは忘れ、明日のことを心配しないで、今日一日を丁寧に、肩の力を抜いて、気楽にのんきに暮らしていこう。」新年にあたって、私も同じことをみんなの前で誓いたい。



雪と感動

(2013.2.01)

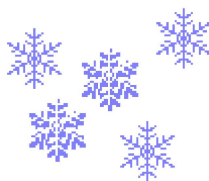


今年は関東地方にも大雪が降りました。雪が降った後のことを考えると、ウンザリします。だから、大人はみんな雪が嫌いです。しかし、子どもは雪が大好きで、雪が降りだすと、嬉しくなります。（犬も昔は大好きでしたが、今は過保護の室内犬が多くなり、「雪やコンコン・・・犬は喜び庭駆けまわり」とはいなくなっているようです。）シンシンと降る雪は、子どもにとって、とても神秘的で、幻想的なものでしょう。しかも、雪合戦やソリ遊びなど、楽しい遊びが目につかびます。後のことなど考えません。大人は、雪が降ると大変だと考えます。その通りなのですが、幼稚園の先生は、大変だから雪の日はお休みになればいいなと、思うようでは、幼稚園の先生失格です。子ども達と、日常とは違った遊びがいっぱいできると喜ばなければダメです。

雪は3歳、4歳にとっては初めての経験かも知れません。生まれて初めて雪を見た時の感動って、どうなのでしょう。考えるだけでワクワクします。寒い日でした。3歳児のクラスで子ども達に絵本を読んであげていた時、静かに絵本を見つめていた子どもの中から、誰かが「あっ！」と外を見て声をあげました。みんなも、絵本から目を外に向け「あつと」言ったあと、声も上げず、黙ってじっと外を見つめていました。いつの間にか、外は雪が降り出し、園庭がうっすらと白くなっていました。本当に心が動いた時は、声にならないのです。しばらく、ガラス戸に顔を付けるようにしてジーっと見ていました。こんな時、絵本も園長も、眼中に入らないのです。少し経ってから、一人の子が私の方を振り向いて「園長先生、雪！」と言うと、みんな「雪だ！雪だ！」と騒ぎだしました。私が「雪、触ってみる？」と言うと、みんな外に出て、手をかざし、チラチラ降る雪にクルクル回って、踊っているようでした。冬の空気と掌に落ちた冷たい雪の感覚、こういう体験が感性を育てるのです。

ミュージカルスターの石丸幹二が、毎日毎日舞台に立ち、あまりの忙しさに、自分を見失いそうになって、休養を取りました。ある日の夕方、西の空に真赤な夕日が落ちていくのを見て、深く感動しました。いつも夕方は舞台や稽古が始まる頃であって、夕日など見たこともなかったのです。それから一年間休養をとり、感動する心を取り戻したとのことでした。

やはり、人は感性を豊かに、感動する心を持たなければなりません。子ども時代は、何でも新鮮でフレッシュに感じられる時代です。音楽が上手にできること、走るのが早いということより、音を感じられること、躍動する喜びを感じることで感性を豊かにし、情緒・情操を豊かにします。こういうことが土台になって、人格が、人間の基礎がしっかりとできるのではないのでしょうか。



二つの子ども観と二つの幼児教育の流れ

(2013.3.01)



発表会が終って、子ども達が、「アー楽しかった。私、上手にできたでしょ。可愛かった？」と言うのを聞いて、ホッとしました。何故、ホッとしたかということ、子ども達に無理をさせているのではないか、子ども達は嫌な思いをしていないか、と心配していたからです。音が苦になってはいけない、みんなと声を合わせ、心を一つにして発表することで、音が楽しくならないといけないと思っていたからです。

最近の日本の幼児教育は、OECD報告や子どもの権利条約とは逆の方向に流れているように感じられます。欧米で、こんな事をしたら、明らかに幼児虐待で訴えられるようなスパルタ幼児施設や、昔から幼児教育界では批判されてきた厳しい指導の下に行われるマーチングや暗記教育が、保護者にうけています。幼児は柔軟で、真綿のように吸収力があるから、たたき込めば何でもできるようになります。親から見ると幼児がこんなことができるようになった、あんなこともできる、という結果を見ると、健気で愛おしいと感じ、涙さえ流すのです。しかし、本来、この時期に体験し、身につけるべきものが、見失われがちになります。重要なのは、結果より過程です。出きる出来ないより、分らないこと、出来ないことに自らやってみて、学ぼうとして、分らなかつたり、出来なかつたら、友人と相談し、もう一度試してみて、決して人のせいにししないで、答えを求めて試行錯誤を繰り返すことが「意欲」を育てます。言われた通りにやるだけだったり、指示命令されたり、強制されてやっていると、自ら学ぼうという意欲は育ちません。学力を高めるには「学ぶ意欲」こそが重要です。

二つの子ども観があります。子どもは未熟で無知で無能だから、大人が早いうちから、次の段階のために強制的に教え込み、訓練していかなければならない、という考え方と、子どもは発達の可能性に満ちていて、自ら体験し、学んでいく力があり、乳幼児期は乳幼児期として大切な時期という考えです。そして、この二つの子ども観とともに、幼児教育のあり方も問われています。前者は、幼児は自ら学ぶことができないから、大人が早くから教え込んでいかなければならず、幼児期は、次の段階の準備のためにあるとします。そして、次の段階への準備となると、より早く、より見映えのする結果を大人に見せること、出来るようになることが幼児教育の役割であるとなります。後者は、幼児は知りたがり、やりたがり、自ら遊びや生活の中でいろんなことを学んでおり、幼児期には、幼児期そのものに、大事な学びや育ちがあり、決して次の準備のためにあるのではなく、幼児期の今の生活こそ大切であり、子どもの日々の生活を充実したものに、幸せにするのが大切であると言います。

世界の先進国やOECDでは後者の考え方が支持されています。又、20年も前に国連で採択された子どもの権利条約では「子どもの最善の利益」を尊重しなければならないとあります。最善の利益とは、子ども達が最も願っていることです。子ども達は受身の存在ではなく、自主的、主体的な存在であり、幼児期の遊びや生活は大切なものであります。日本のいじめや体罰問題の根っこは幼児教育、教育全体のあり方に関わっているのではないのでしょうか。今こそ、古い子ども観、教育観からの転換が必要だと思えます。

「抱っこ」大好き

(2013.4.02)



抱っこが大好きです。子ども…ばかりではありません。私がお好きなのです。ほやほやした抱き心地が、お互いに気持ちよいのです。

今年も節分の日の鬼役をやりました。40年の年季が入っています。お面も衣裳もこっています。勿論、鬼の演技も、そんじょそこらの役者もひれ伏す位の迫力です。大音響と大音声で登場するだけでも、オシッコをチビル位の恐ろしさです。それでも泣きながら、豆をぶつけて挑んでくる「ふたばっ子」は、正に鬼退治の桃太郎ぐらい可憐で可愛らしいのです。その後、お面を取って正体を見せます。すると「どうして、正体を見せてしまうのですか？」と言うお母さんがいました。夜泣きでもされては困りますし、お母様方からまた苦言を呈されるかも知れないので、お面を取り正体をバラし、「もう悪いことはしません。どうか許して下さい。」と謝ります。カツラは被ったままで、お腹にマクラや座布団を詰め込んでいるので、まるであの醜いなんとかデラックスのような姿に、指をさして大笑いしている子もいますが、クラスに戻ってもまだ泣いている子もいます。

衣裳を脱ぎ、各クラスにアフターケアに行きます。「鬼は、本当に園長先生だったでしょう。もう恐くないよねー、じゃ、勇気の充電をしてあげる」と言って、ギューと抱っこしてあげると、ニコニコ笑顔になります。すると他の子どもみんな抱きついてきます。順番にギューっと、いつもより何倍も時間をかけて抱きしめます。私も、ホカホカととても気持ち良くなるのです。昔、虐待防止のための広告に掲っていた文章を思い出しました。勝手に転載します。

子どもの頃に抱き締められた記憶はひとのこころの、奥の方の、大切な場所にずっと残っていく。



そうして、その記憶は、優しさや思いやりの大切さを教えてくれたりそこから先は行っちゃいけないよって、止めてくれたり死んじやいたいくらい切ない時に、支えてくれたりする。

子どもをもっと抱きしめてあげてください。ちっちゃなこころは、いつも手をのばしています。



春光の揺らぎにも君 風にも君

(2013.5.01)



年度初めの忙しさの中、原発被害者の支援をしている友人の応援を兼ね、被災地に行って来た。前回行った時は、狂暴な津波の被害に、声も出ないほどのショックを受けた。土台しか残っていない住宅地の中に、遠くの高い防波堤を越えて、あの大きなテトラポットが散乱していた。ここで、何人の人が波にさらわれ、命を奪われたのだろうか、と胸を打った。

そして、今回、原発により故郷を奪われ、家を奪われ、もう2年もたつのに未だに狭い仮設住宅に追いやられた人々の苦しみと悲しみに接し、何も進んでいない復興に怒りがこみ上げてきた。立ち入り禁止地区の駅のホームに立つと、鉄の塊になった車が折り重なり、駅の時計は2時48分を指したままになっていた。立ち入り禁止のため、あれから何もかも止まったまま、手つかずの状態になっている。街を回ると見事な桜並木が色づいて、また2度目の春がやって来ていた。明らかに新築したばかりだったろうと思われ家もある。夫婦で力を合わせローンを組んで、やっと建てた途端、家から追いやられ、好きだった仕事を奪われた人の話を聞いた。涙も見せず、静かに淡々と話す姿に、尚一層深い悲しみと怒りを感じた。海岸から数メートルはある高台の岬に立つと、はるか遠くに第一原発が見えた。海水を引き込むために、砂丘を削って低くしたのが分る。マリブルーの海に、白波が優しく立って、海は静かだった。白い砂丘に漁船がひっくり返ったまま放置されていた。漁港の施設は、コンクリートを残すのみである。岬の高台の洒落たホテルにまで、津波が襲いかかり破壊されたまま、無残な姿をさらしていた。

被災地に行く前に「原発とうまく付き合う社会に」という投稿を読んだ。「選挙で原発を推進していた党が勝ったのだから、民意は反原発ではない」と述べていた。本当にそうだろうか？選挙の争点をずらしていただけないか。また、原発事故の本当の姿を国民に知らせていただろうか。第一原発近くの中学生在が書いた作文が、昔、東電や行政から表彰された。「原発を危険だなどと騒いでいる人がいますが、原発は危険性のない最もクリーンなエネルギーです」と書いていた。純粋な中学生は、東電や行政の言う事をまるごと信じていた。この中学生も、今は大人になって、避難所でどんなに悔しい思いをしているだろう。あの状況を目にしたら、正しい情報を伝えられていたら…どう考えるだろう。

冒頭の句は、新聞に載っていた震災一年後に詠まれた句である。春の被災地に立った時、手帳に書き留めておいたこの句を思い出した。暖かな春の光の中にも、春風の中にも、愛する人を思い、失った悲しみ・寂しさがこみ上げて、胸に迫った。私達は、子ども達に、苦しみを与えるようことは決してしてはならない。



いつやるか・・・今でしょ！

(2013.6.01)



今年も、個性豊かな三歳児が入園して、てんやわんやの状態から、今ではすっかり幼稚園に慣れ、「園長ゴリラ」なんて言う子も出て来ましたが、まだオムツをしている子が大勢います。ご家庭でも、そろそろ取るチャンスです。取らなければ、いつまでも取れません。

さて、三歳児とは、どういうものなのか、よく理解する必要があります。ひと言で言うと、三歳児は「おもしろい」時期です。発達が急で、はっきりしています。あらゆる物事に対する関心が強く、触ったり、確かめたりし、こだわりも強く表れます。表現が直接的で、思ったり、感じたりしたことを“パツ”と受け止め、ダイレクトに行動します。

そしていつまでも泣いて自己主張（わがまま？）をとおそうとしたり、反対に新しいことにはおじけづいて、かたくなに拒否したりします。表現力や、人とかかわる力、想像力も十分に発達していないので、急に友達をたたく、ける、かみつくななどの行動にでることもあります。

しかし、ある時子ども達はこうした行動を、“ふっ”と乗り越えていきます。その時には、保育者や保護者の援助の仕方が大きくかかわってきます。大人が戸惑う三歳児の行動も、その内面を深く考えると、子どもなりの知恵と心の葛藤を知ることができます。子ども達が何故そんな行動をしたのか、その思いを理解しつつ、相手の痛みに気付かせ、してはいけないことを気長に伝えていくことが大切です。

「三歳だから、まだいい」ということはありません。三歳だからこそ、しっかり、じっくり、手を抜かずに「ていねいな保育」をしていかなければいけません。「三歳だから」と放っておくと、わがままをとおすようになり、四歳、五歳になってから修正することが難しくなります。やりたい放題を許すことは、子ども達を尊重することではなく、放任です。反対に、子ども達を「～ができた」「～ができない」というように評価ばかりしていると、小さく委縮してしまうことがあり、はつらつとした、伸びやかさがなくなってしまいます。子ども達の内面に応じ、その意欲を大切にしたいものです。

[おすすめ]

以上は本園で執筆した「三歳児の保育カリキュラム」という本から抜粋しました。三歳児に限らず、全てのお母さん方が読まれても、子育ての参考になりますし、本園の幼児教育の中味が解ります。購入希望の方は、事務所に申し込んで下さい。



子どものケンカは成長の糧

(2013.7.01)



A君のお父さんから連絡があった。「スクーターの台数を増やして欲しい」とのことであった。スクーターの数は十分にある旨伝えたと「誰もが乗りたい時にすぐに乗れる位の台数にしないから、スクーターを奪い合うことになり、いつもうちの子は乗れないと言っている」と言う。「少し足りないくらいで、貸したり借りたり譲り合うことが、人との関係を作る上で大切なんですけど。それはそれとして、良くA君を見ていきます。また、あまりに不足してしましたら、補充します」と言って電話を切った。

Aの様子を見ていると、確かにスクーターを先に取られることが多かった。それでも、空くのを待つて、サッとスクーターを取り、軽快に乗っていた。ある日、Bが、使っていたスクーターを投げ出し、他の子の方に走って行った。狙いすました様に、Aが空いたスクーターに乗り始めたところ、Bが急いで戻ってきて「それは僕が今、使っていたんだ」とスクーターを力づくで奪い返した。それでもAが執拗に「空いていたから乗ったんだ。返せ」と食い下がったが、その度に小さなAは、ガキ大将のBに突き飛ばされた。その様子を見つめていた私とAの目が合った。明らかに助けを求めている。私は介入しようと思っただが、我慢した。ここで介入したら、「人と関わる力」は育たなくなる。

すると、Bが「じゃーいいよ、少し乗っていいよ」とスクーターをAに譲った。Aがスクーターに乗って、楽しそうに走って来たので、「良かったな！貸してもらったんだ」と声をかけた。他の友達とサッカーを始めたBの所に駆けよって「Bは優しいな、貸してあげたの」と言うと、テレくさそうに笑った。

子どものケンカ、衝突に、すぐに大人が介入して、大岡裁きをしてしまうと、子ども同士が相手の主張や気持ちを互いに理解し、思いやる気持ちは育たなくなってしまう。それぞれの悪いところを指摘し、だからケンカはダメと裁いてしまうと、子ども同士で問題を考え、解決できなくなってしまう。危険な状態にならない限り、徹底的にやり合わせ、口論させ、話し合わせる事が大切である。相手の思いや、気持ち分からない様子の時には、その心を知るように誘導することがあっても、どちらが悪いと介入しない。お互いに相手の思いに気付かせるようにする。頭から怒ったりしては、子どもは育たないのだ。

入園当初、やたらとすぐに噛みつく子がいる。使っていたおもちゃをいきなり取られた時など、言葉で伝えるより、思わず噛んでしまうことがある。いつも一緒にいる、仲の良い子ども同士の場合が多い。噛みつかれた子の痛み、悔しさに共感し、噛みついた子にも気付かせる。また、双方に、なぜ、噛みついたのか考えさせ、言葉で伝えることができるように指導する。いじめは相手への思いやりを育ててこなかったことも原因ではないか。ぶつかり合い口論などは、他者の気持ち・痛み・思いが分かるようになるチャンスである。



秋の自然の中で

(2013.9.02)



猛烈な暑さが続きました。日本だけの現象ではありません。世界中が温暖化し、北海道より北にある世界陸上の行われたモスクワでも、連日30度を超えていました。大気汚染の結果です。このままですと、私達は、子ども達に、汚した地球を引き継がせてしまうことになります。

環境汚染というと、未だに終息しない、原発事故が気になります。福島第一原発事故は、チェルノブイリ原発事故と同じ「レベル7」で、最も深刻な原発事故でしたが、住民の健康被害はずっと少なく済んだとのこと。国連の科学委員会の報告では、非常に危険な状態にあったが、事故後の対応とすみやかな避難が良かったことと、放出された放射性物質の多くが太平洋側に流れたために、住民の健康に悪影響をもたらしてない、と結論づけています。

しかし、放射線被ばくによる直接的な被害はないとしても、間接的な被害は甚大です。福島第一原発周辺の住民は、生まれ育った地に、帰ることができません。未だに避難生活を続けなければならない住民が15万人もおり、健康が悪化しているようです。健康悪化やガンの原因の大半が、生活習慣です。放射線からの直接被害がなくとも、結果的には大きな被害を受けています。

特に、肥満や体力低下など、子どもへの影響が大きく出ています。自然の中での活動を制限された子どもの心と体の発達に影響があるのではないかと危惧しています。原発事故の年から、園外での活動を制限された園の子どもと、そうでない園の子どもでは、明らかに走り方、動き、気力に差がありました。今後も、原発に関しては注視していかなければなりません。過剰な反応は、かえってマイナスになってしまうのではないかと思います。子ども達をより良い環境の中で、伸び伸びと遊ぶ自由と、その環境を引き渡す責任があります。秋の自然の中で、大いに遊びたいものです。



子どもの幸せ

(2013.10.01)



幸せの国と言われたブータンが、近代化の波の中で格差が生れ、幸せを感じる人が、急減したと言われています。ブータンでは、移動手段は徒歩で、みんなが同じように生活し、助け合っていたのに、相変わらず徒歩で移動している人の横を、自動車ですり抜かれたら、「私は幸せでない」となるでしょう。「幸せは自分の心が決めること」なんて、のんきな事を言っている人がいます。幸せは他人との比較で決まってしまうのでしょうか。他人との競争での勝敗で決まってしまうのでしょうか。違うと思います。違うと思いたいです。

運動会が近くなり、年長児は毎日のようにリレーをやります。しかし、Aクラスは一度も勝ったこともない。いや、いつもビリでした。みんな悔しそうでした。「もう、やりたくない。楽しくない。」と言うだろうと思いました。しかし、みんな「楽しい。もう一度やりたい。」と言うのです。勝ち負けがあり、悔しい思いがあっても、自分の力を出し切り、友達と力を合わせ一所懸命走ることを楽しんでいたので、勝ち負けにこだわっていたのは、私だけだったのです。

子どもの幸せって何だろう。人の幸福って何だろう、と考えることがあります。私くらいの年になると、多くの友人・知己がおります。それぞれの人生を垣間見てきました。子どもの頃、塾と家庭教師に追いまくられた友人達のほとんどは、勉強嫌いになって、ドロップアウトし、かえって苦しい人生を歩んでいます。反対に、子どもの頃はワンパクでも、中学後半から、高校・大学以後に努力している友人の方が、人生を楽しんでいる者が多いように感じられます。

友人たちと駅前で一杯やった夜、駅へブラブラ歩いて行くと、小学生とおぼしき影がたくさんありました。学校が終わるとすぐに塾に行き、夜遅くまで勉強しているのでしょうか。いつも競争にさらされ、成績に追いかけられ、うつろな目をして喘いでいるようにしか見えません。子どもらしいハキハキした明るさが、消えてしまっているように感じます。幼少期の子どもに、大切なことは「意欲・心情・態度」を育てることです。人間としての、人格の基礎を作る時期です。この基礎が、しっかりとした土台になり、大きく高く伸びていきます。子ども達から遊びを奪い、追いたてる教育を、ルソーは「不確実な未来のために、確実な今を犠牲にする残酷な教育」と言っています。

子ども達の五感を刺激し、感性を磨くとはこういうことではないかと思えます。そこから、情緒・情操が育ち、美しい物を美しいと感じ、美しい音を美しいと感じ、匂いや味覚が豊かになり、豊かな人生を送れるようになると思います。



秋の香り

(2013.11.01)

NOVEMBER 

初秋の夕方、隣家の子がやって来ました。夕食後、テレビを消し、部屋の照明を落とし、戸を開けて網戸にしました。二人でじっと耳をそば立てていると、鈴虫やおおろぎ・・・いろいろな虫の音が聴こえてきました。しばらく無言でいました。秋の風に乗って、秋の音が心に残りました。

数年前のことですが、三歳児のA君が、金木犀を見上げて小さな鼻をつんと上に向け、目を細めていました。私に気づくと、にっこり笑って「いい匂いがするよ」と言いました。庭の端の金木犀が、あたりに香りを振りまいていました。二人で香りを浴びて立っていると、「何をしてるの?」と、みんなが集まって来ました。A君が「いい匂いがするから・・・」と言うと、みんな鼻を上に向けて「本当だ、いい匂い」「これ何の木?」と言いました。「金木犀と言うんだ。秋になると花を付け香りをまくんだ」と答えました。

それから三歳児クラス担任のY先生の所へ行って、A君と金木犀の話をする、その日は丁度、お散歩に出かける予定でした。「それなら、園庭の端の金木犀の横を通って出掛けて下さい。秋になると、いつも幼稚園の庭の金木犀が香っていた、と子ども達の心に残るといいね。」そして「散歩に行くなら、私も連れて行って」と話しました。

出掛ける前に、クラスに行って、子ども達にお話ししました。「季節って、知っている?」「知っている。秋や冬や春とかでしょ?」「そう、それで、今は?」ポカンとしている子もいましたが「秋・秋・・・」と答えが返ってきました。「秋って、どういうことだろう。夏はどうだった。夏と秋はどう違うんだろう。秋の次の冬はどんなだろう」等・・・話しました。「それでは、今日のお散歩は、ただのお散歩ではありません。秋を探しに行く探検です。みんなは探検隊です。」と言って出掛けました。のんびり歩いていると、私のことを「隊長!」と呼んで、「秋、見つけました。風が少し冷たくなってます」と敬礼をして報告して来ました。そして、美しく変化する自然と、ゆったりと流れる季節を感じながら、のんびり秋を満喫しました。

子ども達の五感を刺激し、感性を磨くとはこういうことではないかと思えます。そこから、情緒・情操が育ち、美しい物を美しいと感じ、美しい音を美しいと感じ、匂いや味覚が豊かになり、豊かな人生を送れるようになると思えます。



笑顔が溢れる社会

(2013.12.02)



幼児虐待の記事が、新聞紙面に載らない日はないくらいである。記事を読む度に心が沈む。なんでこんなことが起こるのだろうと、心が痛む。鬼の様な形相の大人の顔と、恐怖に顔を引きつらせた子どもの顔が浮かぶ。本来、子どもはかわいいものだ。かわいがられる存在だ。子どもの顔を見ると、つい頬がゆるんでしまう。赤ちゃんは、何かに反応すると、にっこりすることがある。新生児微笑というそのかわいらしさに、ついこちらも口元がゆるんで、あやしたりする。

幼稚園に行くと、職員室に入らず、真っ直ぐに子ども達の方に足が向いてしまう。子ども達を見ると、自分がニコニコと笑顔でいるのが分かる。子ども達が大好きだから、子ども達も私のことが大好きなのだと思う。先日も、私が忙しくして、幼稚園に二～三日行けなかった日が続いた時、「年少児の一人が『園長先生に会いたいなー』』」と言ったら、僕も、私も・・・とみんなで会いたいなーと言っていました。」とA先生に言われて、胸がジンとして、益々かわいいなーと思った。こんなこともあった。幼稚園に着くと、子ども達が「おはよう！」と駆け寄って来た。私は職員室の入り口に荷物を置き、子ども達とすぐに遊ぼうとしたが、車に忘れ物をしたことを思い出して、駐車場に走った。忘れ物を取って戻ると、三歳のAちゃんとBくんが泣いていた。「あれ、どうしたの？さっきまでニコニコ笑顔で私にまわりついていたのに」といぶかしげに聞くと、近くにいたC先生が、「園長先生が行っちゃった、と言っていました。園長先生が帰ったと思ったんですよ」と教えてくれた。二人を両手に抱き上げ、私は幸福感に満ち溢れた。

両国の江戸東京博物館では、「明治のこころ展」が開かれている。大森貝塚の発見者エドワード・モースは、日本の庶民の暮らしや心根に魅せられた。当時の庶民は、貧しくともいつもニコニコして晴れ晴れしかったらしい。三回も滞日したモースは、日本は子どもの天国だと強調する。「世界中で、日本ほど子ども達が親切に扱われ、そして子どもの為に深い注意が払われている国はない。その笑顔からすると、子ども達は朝から晩まで幸福であるらしい」と書いている。当時の原板写真の中の人々は、大人も子どもも、みんなニコニコと笑顔に溢れている。物質的には豊かな現代の私たちと子ども達は、どうだろうか。

